

病害虫発生予察情報(10月予報)

令和3年9月29日

静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (10月の県平均平年値)	予報の根拠
稲	トビイロウンカ	発生量：やや少	9月上中旬発生量：少 (－) 9月の成虫誘殺数：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か少ない (＋)
だいち	べと病	発生量：多	9月下旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：高い (－) 降水量：並か少ない (±)
	ハスモンヨトウ	発生量：多 (寄生株率 2.4%)	9月下旬発生量：多 (＋) 9月トラップ捕獲数：並～多 (±～＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か少ない (＋)
	カメムシ類	発生量：多 (寄生株率 12.1%)	9月下旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か少ない (＋)
温州 みかん	青かび・緑かび病	発生量：やや多 (落果発病数 0.6 果/樹)	気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か少ない (±)
	ミカンハダニ	発生量：並 (寄生葉率 1.6%)	9月中下旬発生量：やや少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か少ない (±)
中晩柑類	かいよう病	発生量：やや少 (発病度(果) 0.6)	9月中下旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か少ない (±)
果樹全般	果樹カメムシ	飛来数：並	ヒノキ・スギ寄生数：少 (－) ヒノキ毬果吸汁痕数：少 (－) 9月1～4半月誘殺数：並 (±) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か少ない (±)
茶	チャハマキ	発生量：やや少 (寄生虫数 0.6 頭/1.25m ²)	9月中下旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か少ない (±)
	チャノコカクモン ハマキ	発生量：やや少 (寄生虫数 0.7 頭/1.25m ²)	9月中下旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か少ない (±)
	カンザワハダニ	発生量：多 (寄生葉率 1.5%)	9月中下旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か少ない (±)

作物名	病害虫名	予報 (10月の県平均平年値)	予報の根拠
トマト	葉かび病・ すすかび病	発生量：多 (発病株率14.2%)	9月中旬発生量：多 (+) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：並か少ない (±)
	黄化葉巻病 (タバコ コナジラミ)	発生量 黄化葉巻病：並 (発病株率2.4%) コナジラミ類：多 (寄生株率8.2%)	9月中旬発生量：少 (-) 9月中旬のコナジラミ類発生量：多 (+) 気象予報：気温：高い (+)
だいこん	コナガ	発生量：並 (寄生株率0.1%)	9月トラップ ^o 捕獲数：少 (-) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：並か少ない (+)
ねぎ (白ねぎ)	黒斑病・葉枯病	発生量：多 (発病株率6.2%)	9月中旬発生量：多 (+) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：並か少ない (±)
	ネギアザミウマ	発生量：多 (寄生株率29.5%)	9月中旬発生量：やや多 (+) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：並か少ない (±)
	シロイチモジヨトウ	発生量：やや少 (寄生株率1.4%)	9月中旬発生量：少 (-) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：並か少ない (±)
	ネギハモグリバエ	発生量：やや少 (被害株率41.2%)	9月中旬発生量：少 (-) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：並か少ない (±)
レタス (非結球レタス を除く)	ハスモンヨトウ	発生量：やや多 (寄生株率0.0%)	9月トラップ ^o 捕獲数：並～多 (±～+) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：並か少ない (+)
いちご	炭疽病	発生量：多 (発病株率1.6%)	9月発生量：やや多 (+) 気象予報：気温：高い (+)
	うどんこ病	発生量：少 (発病株率1.5%)	9月発生量：少 (-) 気象予報：気温：高い (-)
	ハダニ類	発生量：やや多 (寄生株率11.6%)	9月発生量：並 (±) 気象予報：気温：高い (+)
	ハスモンヨトウ	発生量：多 (寄生株率0.6%)	9月発生量：やや多 (+) 9月トラップ ^o 捕獲数：並～多 (±～+) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：並か少ない (+)
作物全般	オオタバコガ	発生量：やや多	9月の成虫誘殺数：並～やや多 (±～+) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：並か少ない (+)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年（静岡県過去の10年間）との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年（静岡県過去の10年間）との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況（調査時期と発生量）、気象庁の1か月予報（気温と降水量）を記入しています。その状況が多発要因の場合は（+）、少発要因の場合は（-）を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報は
こちらで
検索！



静岡県農薬安全使用指針
・ 農作物病害虫防除基準

<http://www.s-boujo.jp/>

2 予報の根拠と防除対策

【稲】

●トビイロウンカ

予報の根拠

- ・9月上中旬の巡回調査では、本種の平均寄生株率は0.1頭/株(平年0.7頭/株)と平年より少なかった。
- ・9月第3半旬時点の県内4カ所の予察灯では、本種の誘殺数は平年より少なく推移している。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は並か少ないため、本種の増殖を助長する。

防除対策

- ・気温が高い場合に急増することがある。葉色に注意し、水田内で坪状に葉が黄化している場合は株元を観察し、成幼虫の寄生が多い場合は薬剤防除を行う。

【だいで】

<生育の概況等>

生育は平年並である。

●べと病

予報の根拠

- ・9月下旬の巡回調査では、平均発病株率34.0%(平年19.0%)と平年より多かった。ただし、落葉が見られるような、激しい被害ほ場は確認されなかった。
- ・本病は比較的冷涼(15~20℃)で雨の多いときに発生する。1か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年並か少ないため、本病の発生をあまり助長しない。

防除対策

- ・発生が多い圃場では薬剤散布を行う。薬剤の選択にあたっては収穫前日数に注意する。
- ・常発ほ場においては、来年以降の作付けで、密植を避けて株間の風通しを良くする。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・9月下旬の巡回調査では、平均寄生株率は16.0%(平年9.2%)と平年より多かった。
- ・フェロモントラップの調査では、9月の成虫誘殺数は平年並~多く推移している。例年、10月が発生のピークとなる。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は並か少ないため、本種の増殖を助長する。

防除対策

- ・若齢幼虫による被害葉(白または淡褐色に透けてみえる)を確認した場合は速やかに防除を実施する。

●カメムシ類（ミナミアオカメムシ、ホソハリカメムシ、イチモンジカメムシ）

予報の根拠

- ・ 9月下旬の巡回調査では、平均寄生株率は2.4%（平年1.6%）と平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は並か少ないため、本種の増殖を助長する。
- ・ 近年、ミナミアオカメムシの発生が増加している。

防除対策

- ・ ほ場内の発生状況に注意し、発生を確認した場合は速やかに薬剤防除を実施する。

<その他の病害虫>

●葉焼病

- ・ 9月下旬の巡回調査では、平均発病株率23.1%（平年5.7%）と平年より多かった。
- ・ 病原細菌は、暴風雨等による傷口から侵入するので、暴風雨前または直後に防除を行う。

●コガネムシ類

- ・ 9月下旬の巡回調査では、平均被害株率は54.0%（平年25.2%）と平年より多かった。
- ・ ほ場内の発生に注意し、寄生が多い場合は薬剤防除を実施する。

【温州みかん】

<生育の概況等>

生育は、平年より5日程度早い地域が多い。

●青かび・緑かび病

予報の根拠

- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並か少ないため、果樹園における本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 病原菌は土壤中に生息する。土ぼこりとともに果実表面に付着し、傷口から感染するため、台風などの強風雨は樹上での発生を助長する。
- ・ 樹上発病果が多い場合、放置された摘果果実に孢子が形成されると園内での発生が増加するため、園外に持ち出して処分する。
- ・ 収穫時のハサミ傷や、収穫コンテナに混入した枯枝や小石などによる傷で発病する。果実の運搬、選果が手荒で果皮に傷が付くような場合でも発病するため丁寧な収穫作業を行う。

●ミカンハダニ

予報の根拠

- ・ 9月中下旬の巡回調査では、平均寄生葉率は2.0%（平年2.8%）と平年よりやや少なかった。
- ・ 1か月予報によると、気温は平年よりも高く、降水量は平年並か少ないため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 着色期に寄生すると果実の外観が損なわれることから、発生に注意し、多発している場合は防除を行う。

<その他の病害虫>

●黒点病

- ・ 9月中下旬の巡回調査では、果実の発病度は1.0（平年0.7）と平年より高かった。
- ・ 本病は風雨によって伝染し多雨は発生を助長するため、秋雨も果実への感染を助長する。
- ・ 枯れ枝で胞子が作られるため、樹冠内部の枯れ枝や園の内外に放置された剪定枝、切株などが伝染源となる。これら適宜除去すること、また、除去した枝を園内や周囲に放置しないよう処分を徹底する。

●褐色腐敗病

- ・ 本病原菌は土壌中に生息し、雨による泥のはね上がりなどで遊走子が果実に侵入する。
- ・ 10月に強い降雨があると感染・発病しやすいので、降雨前に防除を行う。過去に発生した園では特に注意が必要である。
- ・ 園内の排水溝の整備、通風を良くするなど地表面の乾燥に努める。マルチ栽培による泥はねの防止や結果枝のつり上げなどで果実を地表面から離すなど耕種的防除に努める。

【中晩柑類】

●かいよう病

予報の根拠

- ・ 9月中下旬の巡回調査では、果実の平均発病度は0.2（平年0.5）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並か少ないため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 傷口より感染するため台風などの強風雨は感染を著しく助長し、発生量が少ない圃場でも急激に多発する可能性がある。気象情報とほ場の発生状況に注意し、防除を行う。
- ・ 本病は、感染した組織内の病原菌に対して薬剤の効果がほぼない。発生が見られる園地では感染拡大を防ぐよう、降雨前の予防散布に重点を置く。
- ・ ミカンハモグリガによる加害も傷感染を著しく助長するため、防除する。
- ・ 10月以降に果実では発病しないが、葉に感染すると翌年の伝染源となる。夏秋枝は罹病しやすく有力な伝染源となるので、本病が多発している圃場では切除する。

【果樹全般（カキ・ウンシュウミカン・キウイフルーツ）】

●カメムシ類（チャバネアオカメムシ・ツヤアオカメムシ・クサギカメムシ）

予報の根拠

- ・7月のヒノキ・スギの着果量指数は3.4（平成4.5）と平成よりやや少なかった。
- ・カメムシ類の繁殖場所であるヒノキ・スギでの叩き落とし調査では、カメムシ類の10結果枝あたり平均寄生数は、9月中下旬に1.2頭（平成5.5頭）と平成より少なかった。
- ・ヒノキ毬果1個あたりのカメムシ吸汁痕数は9.7（平成14.0）と平成より少なかった。毬果1個あたりの吸汁痕数が20を超えると、ヒノキ・スギからカメムシ類が離脱し、餌を求めて果樹園へ飛来する。
- ・県内6カ所に設置されたフェロモントラップにおいて、9月第1～4半旬のカメムシ類の合計誘殺数は、平成並であった。
- ・西部地域3カ所に設置された予察灯において、9月第1～4半旬の合計誘殺数は、平成並であった。
- ・以上の結果、9月第1～4半旬のフェロモントラップ・予察灯の誘殺数が平成並であることから、10月の果樹園への成虫飛来数は平成並と予測される。ただし、8月下旬に西部地域の予察灯で突発的にチャバネアオカメムシが多数誘殺され、果樹園への飛来も局所的に認められたことから、今後の発生状況にも注意が必要である。

防除対策

- ・フェロモントラップ及び予察灯による誘殺数は、静岡県病虫害防除所ホームページを参照する。
- ・ヒノキ、スギ林付近の果樹園では、ほ場の発生状況をよく観察し発生がみられれば防除を行う。

【茶】

<生育の概況等>

9月中下旬の巡回調査時では、いずれの茶園も秋芽生育期であった。秋冬番の摘採はまだ始まっていなかった。

●チャハマキ

予報の根拠

- ・9月中下旬の巡回調査では、平均寄生虫数0.04頭/1.25㎡（平成0.23頭/1.25㎡）と平成より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平成より高く、降水量は平成並か少ないため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・前の世代（9月上旬）に被害が見られた茶園では、摘採・整枝後早めに防除を行う。

●チャノコカクモンハマキ

予報の根拠

- ・9月中下旬の巡回調査では、平均寄生虫数0.08頭/1.25㎡（平成0.39頭）と平成より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平成より高く、降水量は平成並か少ないため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・前の世代（9月上旬）に被害が見られた茶園では、摘採・整枝後早めに防除を行う。

●カンザワハダニ

予報の根拠

- ・9月中下旬の巡回調査では、摘採面の平均寄生葉率は4.8%（平成2.7%）と平成より多かった。
- ・天敵のカブリダニ類の発生は、茶園4カ所の叩き落とし調査で平均0.1頭（平成0.6頭）と、平成より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平成より高く、降水量は平成並か少ないため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・既に発生が多い茶園では、整枝後に防除を行う。今後の発生状況をよく観察し、発生が見られたら防除を実施する。

<その他の病害虫>

●褐色円星病

- ・夏～秋に感染し緑斑症状を示した葉が、翌春になって落葉を引き起こす。よって、春になってからの防除では手遅れである。今春、多発したほ場で9月以降に殺菌剤を散布していない場合には、10月中旬に1回防除を行っておくと良い。

●ナガチャコガネ

- ・一番茶で本種による被害が見られた茶園では、10月下旬から11月にかけて畝間から雨落ち部を掘り、幼虫が地表面近くに上がってきたのを確認した上で、薬剤の土壌灌注処理を行う。
- ・薬剤処理は、降雨後に行うと効果的である。

●チャトゲコナジラミ

- ・9月に成虫の発生が目立った茶園では、秋整枝終了後に行うカンザワハダニの防除時に、両種に登録のある薬剤を用いて防除する。防除は幼虫の寄生が多い裾部の葉裏に薬液が届くように散布する。また防除前に裾刈りを行うと薬剤が茶株内部まで届き、防除効果が高まる。

【トマト】

<生育の概況等>

生育は平成並～やや早い。

●葉かび・すすかび病

予報の根拠

- ・9月中旬の中遠地区での巡回調査では、平均発病株率22.8%（平成7.2%）と平成より多かったが、これは一部ほ場で多発していたためである。
- ・1か月予報では、気温は平成より高く、降水量は平成並か少ないため、本病の発生をやや助長する（菌の生育適温は葉かび病20～25℃、すすかび病26～28℃で、どちらも多湿条件で発病が多くなる）。

防除対策

- ・本病は潜伏期間が2週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が劣るため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・多湿にならないように換気につとめ、過度の灌水を避ける。
- ・被害葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して処分する。特に多発生ほ場では摘み取り作業を徹底する。
- ・本県では、秋期はすすかび病の発生が多い傾向がある。

●黄化葉巻病（タバココナジラミ）

予報の根拠

- ・9月中旬の中遠地区での巡回調査では、本病の平均発病株率は0.5%（平年1.0%）と平年より少なかった。
- ・媒介虫のコナジラミ類の平均寄生株率は8.8%（平年4.4%）と平年より多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、コナジラミ類の増殖を助長する。

防除対策

- ・発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、ハウス外の土中に埋めるか、ビニール袋に入れて腐らせる等して適切に処分する。
- ・脇芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
- ・タバココナジラミに対して以下の防除を徹底する。
 - 施設開口部に防虫ネット（目合い0.4mm以下）を設置し、侵入を抑制する。
 - 新芽への成虫の寄生や黄色粘着板の捕獲数に注意し、発生が増加する場合は薬剤防除を実施する。

【だいこん】

●コナガ

予報の根拠

- ・フェロモントラップの調査によると、9月の成虫誘殺数は平年より少なく推移している。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は並か少ないため、本種の増殖を助長する。

防除対策

- ・ほ場内の発生に注意し、初期防除に努める。

<その他の病害虫>

●軟腐病・黒腐病・黒斑細菌病

- ・高温・多雨の条件で発生が多くなる。1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並か少ないため、本病の発生をやや助長する。
- ・生育の衰えは発生を助長するため、排水に注意し、適切な管理に努める。
- ・病原細菌は、暴風雨等による傷口から侵入するので、暴風雨前または直後に防除を行う。特に、葉柄基部から侵入した場合は根部に影響を与え、商品価値を落とすこともあるため注意する。

●モザイク病（アブラムシ類）

- ・モザイク病の発生がみられた場合は、早めに発病株を抜き取り土中に埋めるか、ビニール袋に入れて腐らせる等して適切に処分するとともに、アブラムシ類の防除を行う。

【ねぎ（白ねぎ）】

<生育の概況等>

生育は平年並で推移している。

●黒斑病・葉枯病

予報の根拠

- ・9月中旬の巡回調査では、本病の平均発病株率は6.8%（平年4.6%）と平年より多かった。
- ・1か月予報では、降水量は平年並か少ないが、気温は平年より高いため、黒斑病は発生が助長される（黒斑病菌の分生子の発芽・形成適温24～27℃、葉枯病多発気温15～20℃）。

防除対策

- ・本病は多湿条件で多発するため、植え溝の両端に排水用の溝を切るなどして、ほ場排水を良くする。また、肥料の過不足により発生しやすいため肥培管理を適切に行う。
- ・薬剤防除は予防散布や初期発生時の薬剤散布の効果が高い。このため、各薬剤の使用回数に注意し防除する。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

- ・9月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は30.4%（平年26.4%）と平年よりやや多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並か少ないため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・例年、10月は本種の発生程度が高まる。多発するとネギの生育が遅れるため、発生初期に防除する。発生の多いほ場では早めに防除を行う。

●シロイチモジヨトウ

予報の根拠

- ・9月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は1.4%（平年2.4%）と平年より少なかった。
- ・静岡県磐田市（農林技術研究所内）のフェロモントラップによる誘殺数は、9.5半旬時点で25.6頭となっておりほぼ平年並である。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並か少ないため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ほ場内を観察し、葉に卵塊（数粒～数十粒の卵の塊で灰白色の毛に覆われている）を見つけた場合は、早急に除去する。
- ・多発ほ場では、定期的に薬剤防除を実施する。

●ネギハモグリバエ

予報の根拠

- ・ 9月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は23.2%（平年47.0%）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並か少ないため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 本種が多発すると生育が遅れるため、発生が見られるほ場では早期に防除する。

【レタス(非結球レタスを除く)】

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・ フェロモントラップの調査では、9月の成虫誘殺数は平年並～多く推移している。例年、10月が発生のピークとなる。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は並か少ないため、本種の増殖を助長する。

防除対策

- ・ 本種は中齢以降では薬剤の効果が悪いため、ほ場内での発生に注意し、若齢幼虫の防除に努める。

<その他の病害虫>

●ビッグベイン病

- ・ 本病は土壌伝染性のため、常発地では土壌消毒を行う。
- ・ 本病の発生が確認された地域からは土壌の移動をしない。
- ・ 発病ほ場で使用した農機具は十分水洗いし、消毒する。

●斑点細菌病

- ・ 本病は降雨により発病が助長されるため、降雨後はなるべく早く薬剤を散布して予防に努める。
- ・ 発病葉は摘み取って、ほ場外に持ち出して処分する。

●べと病

- ・ 初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。特に、育苗期に本病と疑われる症状があった場合や、周辺でべと病が多発している場合など、感染源が多いと思われるほ場では注意する。
- ・ 育苗期の防除を徹底し、発病株を本ほ場に定植しないよう苗を厳選する。
- ・ 発病葉は摘み取って、ほ場外に持ち出して処分する。

●モザイク病(アブラムシ類)

- ・ 感染時期が早いほど被害が大きいため、ウイルスを伝搬するアブラムシ類の薬剤防除は、特に育苗期や定植後の生育前半に徹底して行う。
- ・ 発生がみられた場合は、早めに発病株を抜き取り土中に埋めるか、ビニール袋に入れて腐らせる等して適切に処分する。

●ナモグリバエ

- ・ 常発地域では、育苗期後半または定植時に薬剤を処理する。
- ・ 定植後は初期発生に注意し、発生を確認した場合は薬剤防除を行う。

【いちご】

<生育の概況等>

苗の生育は平年よりやや早く推移している。

●炭疽病

予報の根拠

- ・ 8月の育苗ほの巡回調査では、平均発病株率は2.7%（平年1.4%）と平年より多かった。
- ・ 病害虫防除員の報告より、9月発生量は大部分の県内主要産地で平年よりやや多い。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ ほ場の見回りを徹底し、発病株や発病が疑われる株を見つけたら、培地（培土）も含めて抜き取り、ビニール袋に入れて処分する。
- ・ 発病後の防除は困難であるため、発病前から定期的に予防散布を行う。特に下葉除去など株を傷つけるような作業後は重点的に行う。なお、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

●うどんこ病

予報の根拠

- ・ 8月の育苗ほの巡回調査では、平均発病株率は0.1%（平年4.2%）と平年より少なかった。
- ・ 病害虫防除員の報告より、9月発生量は大部分の県内主要産地で平年並みか平年よりやや少ない。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生を助長しない。

防除対策

- ・ 胞子の発芽適温は20℃前後であり高温期の発病は抑制されるが、気温の低下に従って発生が増加する。
- ・ 6、7月の苗場で発生がみられたほ場では、予防散布を行い、定植初期の防除を徹底する。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・ 病害虫防除員からの9月の報告によると、主要産地における発生量は平年並～やや多く、全体的には平年並であった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 寄生が認められた場合は少発生のうちに防除を徹底する。
- ・ 天敵（チリカブリダニ、ミヤコカブリダニ）を利用する場合は、事前に防除を徹底し、天敵導入時にはハダニの密度が低くなるようにする。ハウス内にハダニがほとんどいない状態で天敵を放飼することが重要である。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・フェロモントラップの調査によると、9月の成虫誘殺数は、平年並～多く推移している。例年10月が発生のピークとなる。
- ・病害虫防除員からの9月の報告によると、主要産地における発生量は平年並～多い。
- ・1か月予報では、気温は平年よりも高く、降水量は平年並か少ないため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・施設の開口部に防虫網を設置し侵入を防ぐ。初期発生に注意し、若齢のうちに防除を行う。

【作物全般】

●オオタバコガ

予報の根拠

- ・浜松市のキク産地におけるフェロモントラップの誘殺数は、平年並で推移している。磐田市のフェロモントラップでは、平年よりやや多く推移している。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は並か少ないため、本種の増殖を助長する。

防除対策

- ・芽における被害の発生に注意し、初期防除に努める。

3 季節予報

● 1か月予報（東海地方 令和3年9月23日 名古屋地方気象台発表）

【予報期間】 9月25日から10月24日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月	天候	天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率60%です。
	降水量	降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。
	日照時間	日照時間は、平年並または多い確率ともに40%です。
1週目	気温	1週目は、高い確率50%です。
2週目	気温	2週目は、高い確率60%です。
3～4週目	気温	3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

【確率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	10	30	60
1か月	降水量	40	40	20
1か月	日照時間	20	40	40
1週目	気温	10	40	50
2週目	気温	10	30	60
3～4週目	気温	20	40	40

【予報の対象期間】

1か月	：	9月25日（土）～10月24日（日）
1週目	：	9月25日（土）～10月 1日（金）
2週目	：	10月 2日（土）～10月 8日（金）
3～4週目	：	10月 9日（土）～10月22日（金）

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い（少ない）」「平年並」「高い（多い）」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020年の30年間における各階級の出現率が等分（それぞれ33%）となるように決めてあります。（気候的出現率と呼びます）。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い（少ない）場合は「平年に比べて多い（少ない）」、また平年の日数と同程度に多い（少ない）場合には「平年と同様に多い（少ない）」と表現します。なお、単に多い（少ない）と表現した場合には対象期間の2分の1より多い（少ない）ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780 URL https://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html
--